

## コロナ状況下における学校図書館

2019年末に中国で感染者が出た新型コロナウイルス（COVID-19）は、日本国内では2020年1月16日に第1例目の感染者が出、その後全国に広まって行きました。2月27日には、子どもたちには感染が広まっていなかったにもかかわらず、当時の安倍政権が突然全国の小中学校の一斉休校を要請し、学校もコロナの影響を大きく受けたのでした。休校は、3月から、最長約3カ月に及びました。

その間、学校図書館も多くの学校で閉鎖を余儀なくされ、学校が再開されてからも、感染拡大防止の観点から、図書の貸し出しの制限、机や座席の距離を開ける、入館者の人数制限をする、など様々な対策が取られました。また多くの学校で実施されていた、読書ボランティアによる読み聞かせも一時中止したり、コロナ前とは形態を変えて実施せざるを得ない状況にありました。さらに公共図書館も一定期間閉館に追い込まれた館が多く、この3年間の子どもの読書環境への影響は大きかったと言わざるを得ません。

2023年3月現在、第8波の感染拡大が収まり、マスクの着用が原則不要となるなど、学校図書館もようやく手探りしつつも元のような姿を取り戻そうとしています。さらに5月から新型コロナウイルスの感染法上の分類が5類に移行すれば、学校図書館にも、コロナ前の日常が戻ってくると予想されます。

このような時機に、私たち「学校図書館を考える」プロジェクトでは、栃木県内の小中学校において、学校図書館でどのようにコロナに対する対策や工夫がなされたのかを記録に残しておきたいと考え、アンケートを実施しました。アンケートは、「学校図書館を考えるプロジェクト」のメンバーや会員のつてを頼って回答していただいたものなので、全県を網羅することはできませんでしたが、多くの学校司書、支援員、ボランティアの方々のご協力を得てまとめることができました。

この場を借りて、皆さまにお礼を申し上げます。

コロナ状況下における読書環境が子どもたちに及ぼした影響については、検証することは難しいと思いますが、今後も見つめ続けて行きたいと考えています。

